

編集後記：映画はたまに見る程度ですが、気象をテーマにした映画を見つけると途端に興味を湧いてきます。有名なものといえば、地球温暖化による極端な気候変動を描いた「デイ・アフター・トゥモロー」(2004年)、竜巻を追いかけるストームチェイサーを描いた「ツイスター」(1996年)や「イントゥ・ザ・ストーム」(2014年)あたりでしょうか。「ジオストーム」(2017年)や「天気の子」(2019年)では、方法は異なりますが気象がコントロールされるものとして描かれています。少し変わり種で「ラプラスの魔女」(2018年)では、空気の流れを予測できてしまう、気象に携わる人間として非常に魅力的な能力を持った人物が登場します。実話を基にした作品もありますが、多くが想像力に富んだフィクションとして描かれているので、「これは正しい」「ここは間違っている」「いや、むしろこうなるはずだ」などと仲間内で盛り上がるのも楽しみの一つではないでしょうか。

愛知県で生まれ育った私には、「伊勢湾台風物語」

(1989年)の記憶が鮮明です。台風によって発生した高潮が防潮堤を乗り越えて町を水没させ、港の貯木場から流された木材が民家を破壊していく様子に衝撃を受けました。「伊勢湾台風物語」は小学生の頃にテレビで放送されたのを見たのが最初で、その頃は台風といえば「学校が休みになる」程度しか考えていませんでしたが、この映画で初めて台風の怖さを理解したと記憶しています。名古屋地方気象台が台風災害から人々を守るために尽力する様子も描かれていますが、職員の家族の安否も確認できず、庁舎が壊れていく中で業務にあたる姿には、現在が安全を最優先に考える時代で良かったと再認識させられます。

今年も早速、気球を使って高高度の大気観測を行った気象学者を描いた「イントゥ・ザ・スカイ 気球で未来を変えたふたり」が上映されています。気象がテーマの映画、今後も楽しみです。

(長屋幸一)